

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

【氏名】

江川 あゆみ

【所属】（助成決定時）

早稲田大学 教育・総合科学学術院

【研究題目】

「動物文学」の成立に関する歴史社会学的研究

【研究の目的】（400字程度）

本研究では平岩米吉の動物研究と『動物文学』創刊までの過程を中心に研究することで、「動物文学」とはどのような社会的文脈のなかで、問題意識と思想および実践をとめないながら形を持ち始め、文学ジャンルとして成立していったのか明らかにする。このような歴史社会学的方法を通して、①「動物文学」が近代日本において、生物学、民俗学、文学など文理にわたる諸領域と自然・動物と人間社会を架橋する近代思想および仏教思想が交差する地点に誕生した知の領域であることが具体的様相をもって明らかとなり、②「動物文学」の持つ批評の射程を描き出すことにより、これまで評価されてこなかったこのジャンルの文化的意義もまた論じられることとなる。なお、本研究を進める上での史資料として、平岩米吉邸売却の際に公益財団法人日本自然保護協会が保存し、報告者が研究のため協会から借用している平岩米吉邸資料群を使用する。

【研究の内容・方法】（800字程度）

本研究では、ある事象やテキストをそれが実践された時代と構造の文脈のなかに置き戻す歴史社会学の観点から次の3つの課題を設定する。

課題①：平岩米吉が雑誌『動物文学』創刊に至るまでに刊行した編著書および雑誌研究

平岩米吉は『動物文学』創刊に至るまでに、幼児の自由詩集『人形の耳』（1930）の編著と、個人雑誌『変態随筆』（1931）の発行、雑誌『母性』（1931-33）の創刊を行なっている。その後、1933年に『母性』を『子供の詩・研究』に改題、同時に『科学と芸術』を創刊、翌年『科学と芸術』を改題するかたちで『動物文学』を創刊した。

本研究期間にあたる1年間では、『人形の耳』『母性』『子供の詩・研究』と続く幼児の発話への関心を、当時の子どもの情操教育との関わりから調査を進める。

課題②：平岩米吉の動物研究

報告者は平岩による一連の動物研究を3つに大別できると考えている。すなわち、〈動物の生態・心理研究〉、〈人間と動物の関係史〉、〈動物文学〉である。本研究期間にあたる1年間では、平岩米吉の〈動物の生態・心理研究〉について、それがどのような背景と文化的意味を持つ実践だったのか、特に、「野生」と「ドメスティケーション」という社会と自然をめぐる2つの極という観点から調査し、論文文化を進める。

課題③：平岩米吉邸資料調査

平岩米吉の長女で『動物文学』2代目主幹である平岩由伎子氏が2017年に逝去したのち、遺族関係者の要請により公益財団法人日本自然保護協会が2019年に平岩邸に保存されていた資料群の保存活動を行なった。申請者は2021年より、協会からこの資料を研究のために借用し、調査を進め、その成果を発表してきた。本研究期間にあたる1年間では課題①②のうち、本研究期間の内容に関連する資料を中心に調査し、結果をこれまでと同様に大学の紀要で発表する。

上記の3つの課題を通して、「動物文学」がいかなる近代思想と知の潮流、平岩米吉の問題意識、思想、実践が重なるなかで現れてきたのか、その複雑な過程を明らかにしていく。

【結論・考察】（400字程度）

課題①は課題③の資料調査と合わせて進めた。研究成果の一つである調査報告書では、文献調査および資料調査から、平岩米吉の「幼児の自由詩」という取り組みが、北原白秋によって『赤い鳥』において唱導された「児童自由詩」から影響を受けたものである可能性を指摘した。平岩の取り組みは、大正自由教育運動のなかで白秋が提唱した「児童自由詩」と、「イエ」と対照される「家庭」が広まりつつあるなか、子育てをしながら聞く我が子の発話を切り捨てず、芸術的に昇華しようとする文芸運動であると位置づけられるのではないかと考えている。この点について引き続き、調査と論文化を進めていく予定である。

課題②に関する研究では、平岩米吉の動物研究のなかでも特に〈動物の生態研究〉の方法論に焦点を当てて研究を進めた。平岩による動物研究の方法が成立するパラダイムを〈飼養馴致パラダイム〉と名づけ、同時代に広まり始める野生条件下の動物研究が成立するパラダイムを〈野生観察パラダイム〉と名づけた。野生とドメスティケーションという社会と自然・動物をめぐる関係の両極のあわいで文学と動物研究とが関わり合いながら自然・動物をめぐる文化が形成されていく。そのような見通しで平岩の動物研究に関する論文の執筆を進めている。